慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーラル・ヒストリーの可能性と日本との関連
Sub Title	The potential of oral history and its relevance in Japan
Author	Thompson, Paul(Sakai, Junko) 酒井, 順子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2003
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.96, No.3 (2003. 10) ,p.291(17)- 313(39)
JaLC DOI	10.14991/001.20031001-0017
Abstract	本論文は, オーラル・ヒストリーを広義に解釈し, その特徴が学際的であること, 社会的行為であること, 数量調査と併用できる質的調査であることを論じる。オーラル・ヒストリーが扱う主要なテーマは, 文書史料に現れない声を聞くこと, これまで隠されてきた領域を明らかにすること, 神話と伝承の意味を探ることである。また, 記憶, ナラティヴの分析, 資料の共有, 新技術の発展など, オーラル・ヒストリーが直面している新たな課題について論じ, 日本におけるオーラル・ヒストリーの発展との関連を考察する。
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20031001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」96巻3号（2003年10月）

オーラル・ヒストリーの可能性と日本との関連*

ポール・トンプソン
酒　井　順　子　訳

要　　旨

本論文は，オーラル・ヒストリーを広義に解釈し，その特徴が学際的であること，社会的行為であること，数量調査と併用できる質的調査であることを論じる。オーラル・ヒストリーが扱う主要なテーマは，文書史料に現れない声を聞くこと，これまで隠されてきた領域を明らかにすること，神話と伝承の意味を探ることである。また，記憶，ナラティヴの分析，資料の共有，新技術の発展など，オーラル・ヒストリーが直面している新たな課題について論じ，日本におけるオーラル・ヒストリーの発展との関連を考察する。

キーワード

オーラル・ヒストリー，質的調査，記憶，ナラティヴ，資料保存

新しい世紀の初めにあたり，私たちは，オーラル・ヒストリーの将来的可能性についてどのようなヴィジョンを持てるのだろうか。これまで私自身が30年以上にわたってオーラル・ヒストリー研究を経験してきたことを基にして，新たな世紀の挑戦にどのように答え得るか，広い視点から述べてみたい。さらに日本でのオーラル・ヒストリーの適用についても考察してみたい。

I　オーラル・ヒストリーを定義する

a）学際性

21世紀におけるオーラル・ヒストリーの可能性とは何かという問いに答えようとすると，直ちに次の疑問が生じてくる。それは「オーラル・ヒストリー」とは何を意味するのだろうかという問いである。なんといっても，私自身は「オーラル・ヒストリー」を幅広く定義したいとおもっていることを強調したい。つまり，人々の声を聞き，彼らの記憶と経験を記録して，歴史と変動する社会

＊　この論文は2003年3月13日に，慶應義塾大学（経済学部教育基金による招聘）で行なった講義のために用意したものである。

と，そして文化を解釈することを意味しているのである。オーラル・ヒストリーを定式化された方法による狭く定義された作業過程として，あるいは他の分野から隔離されたある特定分野における下位の学問領域として設定する試みからは，あまり得るところはないと私は考える。

最初にいっておきたいのは，オーラル・ヒストリーは，いつも本質的に学際的なものであったことである。つまり，社会学者，人類学者，歴史家，そして文学や文化を学ぶ者たちの十字路であるということである。実際，私自身の研究生活を通じて，ある学問分野が新しい研究の流行によっていかに変わりうるかを見てきたが，学問分野間の境界を越えておきる人間の相互作用という基盤の上にオーラル・ヒストリーが成り立っていることが，オーラル・ヒストリーの重要な強みであると私はみなしている。

このことは，日本においてはより困難なアプローチであるかもしれない。日本では，学問の境界を越えた連携はさほど強くないからである。にもかかわらず，学問間の境界を越えた連携の機会は確かに存在する。というのは，オーラル・ヒストリーとライフ・ヒストリーの手法は日本の歴史家の間だけでなく，人類学者や，最もよく知られているように社会学者たちによって発展してきたからである。原田勝弘が1980年代初頭にエセックス大学で一年間私たちと一緒に研究したとき，私は初めて日本のライフ・ストーリー社会学に出会った。そのときには中野卓による，古典となったある日本女性のライフ・ストーリーはすでに出版されていた。中野卓はまた生活史研究会をつくり，もっと最近では中野と桜井厚はこの分野の研究を集めて編集した。

オーラル・ヒストリーを使った私自身の研究は，そのような学際的文脈から生じたものである。というのは，私は社会史家として訓練された後に，1964年からエセックス大学の社会学部に来て教えるようになったからである。私が20世紀初頭の20年間のイギリス社会史を書くように依頼されたとき，――それは後に『エドワード時代の人々』（*The Edwardians*, 1975）という著書になったのだが，――20世紀初頭を生きた男女にインタビューをするように最初に私に薦めてくれたのは社会学部の同僚たちだった。私が採用した方法の多くは，クオータ・サンプルや詳細なインタビュー・ガイドも含めて，社会学から影響を受けたものであった。だが，私がこの方法論に出会ったとき，――当時方法論といっても私たちは「オーラル・ヒストリー」という用語さえ聞いたことがなかったのだが――社会史のためのインタビューとみなしたので，私の関心は，私のインタビュイー（インタビューをされる人）の最近の生活よりも過去にあった。その結果，私たちが録音した444人の男女の誰からも，1920年以後の経験については聞かれなかったのである。このことは，彼らの証言の価値を本来の価値よりも歴史学的にも社会学的にも低めることとなったのである。今振り返って見ると，とても残念なことであった。

社会学的文脈のなかで研究を続けてきて，そして特にダニエル・ベルトーのような社会学者である仲間の影響を受けて，私は幅広いアプローチを取るようになった。そしてそのようなアプローチによって，個人のライフ・ストーリーを集めて，あるいはある特定の家族の何世代かにインタビュ

ーした資料を集めたりしながら，次第に過去と現在の双方に私の関心が融合していった。このアプローチの例としてあげられる最近の私の本2冊は，『階層移動への道』（*Pathways to Social Class*, 1997）と『ステップファミリーに育つ』（*Growing Up in Step Families*, 1997）である。この2冊は，歴史学的でもあると同時に社会学的な書物でもある。ステップファミリーに関する後者の本では，50人の男女のライフ・ストーリーを録音した。全員が1958年生まれであり，16歳のころ両親のうちのひとりが再婚していた。この50人は，全国同一年齢群調査から選ばれ，その後の人生において何度かインタビューをされた。しかし，彼らは一度も詳細なインタビューをされたことはなかった。私たちが彼らへのインタビューを録音したときは30代半ばだったが，それほど遠い昔ではない彼らの子供時代がすでに消え去った時代に属していることがはっきりしていたのは驚くべきことであった。たとえば，彼らの子供時代には，覚せい剤の使用は少なく，完全雇用が実現され，離婚もまれであった。そうした違いは，彼らの子供時代をすでに歴史的なものにしているのである。

また，オーラル・ヒストリー研究と人類学研究には非常に密接な関連があると私は考えている。もちろん，アメリカ大陸の国々では，人類学には優れたライフ・ストーリー研究の長い伝統がある。ライフ・ストーリーは日記などのドキュメントからもなされうる研究であるし，また，メモをとるだけで録音しない人類学者は多い。そのなかには，たとえばオスカー・ルイスの『ペドロ・マルティネス』（*Pedro Maritnez*）や，シドニー・ミンツの『サトウキビ労働者』（*Worker in the Cane*）などがある。しかしながら，そのような人類学のインタビューが必ずしも録音されていなかったことは残念であり，またオスカー・ルイスは絶えず「貧困の文化」に関する彼の単純な理解について批判されてきた。しかし，この2冊は他文化における経験を西洋の非常に幅広い読者層に伝えたという点において強い影響力を持った本であった。 反対に，私自身の研究において，私は解釈の仕方においても方法論においても人類学の影響を受けてきた。そして，次第に私たちの日常生活を形作る神話の力と，家族内で世代間を越えて伝えられる神話の力に関心を持つようになった（『私たちを導く神話』（*The Myths We Live By*, 1990），『世代間』（*Between Generations*, 1993））。私はまた，録音されたインタビューとともに，たとえば参与観察などの人類学的アプローチを『漁業に生きる』（*Living the Fishing*, 1983）という著書において，また私の現在の研究であるトランスナショナル・ジャマイカン・ファミリーにおいても取り入れてきた。鯖を追いかける漁船に乗ったり，港のカフェに座り，引退した船長と話したりした。あるいは，ジャマイカの田舎の村のある家族と一緒に住んだりして，葬式の通夜にも参加したが，いつも私のフィールドワークノートに書き込むために重要な細部を心に留めていた。方法論におけるそのような学際的な組み合わせは，将来の研究に最も大きな可能性をもたらすと私は信じている。

b）オーラル・ヒストリーと社会的行為

第2に，オーラル・ヒストリーとソーシャル・ワークあるいは開発問題の間にも重要な関連性が

ある。『ステップファミリーに育つ』を研究したときの研究チームは，複数の分野にまたがる人々で構成されていた。社会史研究者でありかつ社会学者である私，家族療法の専門家が2人，そして精神科医が1人であった。その本が単なる回顧的な解釈であるだけでなく，ステップファミリーとして家族生活を始めようとする両親と子供たちに対し，実践的なことを示唆しうる本にしようと我々は懸命であった。もっと一般的にいえば，もしオーラル・ヒストリー研究者が心理学的問題に関しても敏感であるならば，自分たちで録音したライフ・ストーリーの解釈から得るものが大きい。そしてこの点において，記憶と抑圧，セクシュアリティー，そして特に愛情についての精神分析から得られる重要な洞察ももちろんあるが，それらは概してオーラル・ヒストリーで得られる証拠と実際に結びつけることが非常に難しい。オーラル・ヒストリーで集められる証拠は抑圧されたことよりも覚えられていることを扱い，幼児期よりも子供時代や成年期を扱うからである。これらの理由から，たとえばマイケル・ラターあるいはジョージ・ブラウンによる体系的な精神医学的調査から得られる証拠，あるいは家族療法の理論と実践からの洞察を，オーラル・ヒストリーの参考にするほうが簡単なことが多い。家族療法士は，家族を連結した構造的システムであると解釈し，同時に感情的かつ社会的であると解釈するのである。

イギリスにおいて，ソーシャル・ワークという意味では，1970年代以来最も重要なオーラル・ヒストリーの発展は回想療法に見られる。回想療法は，私たちがインタビューをし始めたころに気がついた偶発的な成果から発展したものであった。非常に多くの場合，病気だったり，痛みがあったり，あるいは悲しそうだった老人が，インタビュー後の親戚からの報告によれば，身体的に以前より元気になったり，陽気になったりしたのである。イギリスでは，特に，1970年代にはエセックス大学で私と一緒に研究をした，ジョアンナ・ボーナットの指導で回想療法は発展した。回想療法は共通の人生経験に関してのグループ・ディスカッションを中心にするものだが，ディスカッションは，古い写真，音楽，参加者の若いころに書きとめられた記憶によって促進されるのが典型的である。多くの老人にとって，特に，孤立していたりあるいは鬱病になったりしていた老人や，さらには口がきけなくなったり沈黙しているだけの段階になった老人にとって，そのような回想グループは人生と他人との社会的つながりに再び能動的な関心を持つようになる転機となりうることがわかったのである。それゆえに，回想療法はソーシャル・ワーカーやホスピタル・ワーカーによって広く使われてきたのである。

開発問題という意味では，ヒューゴ・スリムと私が『変革のために聞く』(*Listening for a Change*, 1993) で主張したように，豊かな人も貧しい人も，男も女も含めて，その土地の人々のさまざまな人生経験を参考にすることが，的確な援助を成功裏に計画するためには決定的に重要である。たとえば，ケララにおける漁業への援助計画が大型漁船に融資することに全面的に集中したのは，男の漁師たちが大型漁船への融資を要求したからであった。しかし男性は，漁業のうちの半分を担っているにすぎない。魚の加工や販売は全面的に同じ家族内の女性たちによってなされていた。漁民た

ちのストーリーを続けて聞くと，建物への投資や，魚の内臓をとりだし保存し販売する機器への投資も，同様に必要であることがわかったのである。

日本でも社会政策立案者とのインタビューが行われているが，それはオーラル・ヒストリーそれ自体を変化の原動力として使うものとはいささか異なっている。この点もまた，日本におけるさらなる困難であるかもしれない。というのは，オーラル・ヒストリーを変化の原動力として効果的に使うためには，アカデミズムの歴史家とコミュニティーの歴史家との間に現存する不運な溝の間に橋を架けることが特に重要だからである。

c）質的調査と数量調査をともに用いる

第3に，最も優れたオーラル・ヒストリー研究は，個人の人生とより広い社会の分析との両方を理解し，解釈するものであると私は信じている。いいかえるならば，オーラル・ヒストリーは質的調査と数量調査の両方から得られる資料を結びつけるものなのである。

だからこそ，私たちが録音する人を選ぶ――サンプリング――にあたって無計画にアプローチすることで満足してはならないのである。というのは，無計画なサンプリングではインタビューから引き出す結論が説得力に欠けるものになるからである。いかなる研究プロジェクトでも，サンプリングにあたってふさわしい戦略を練り上げることに格別の注意を払わなければならない。もちろんさまざまなサンプリングのとり方がありうる。完全な代表性を持つサンプルを作りだすためには，現存する調査あるいは同一年齢群調査から下位サンプルをとりだすか，あるいは，地域的にせよ全国的にせよ，新しいランダム・サンプルかクオータ・サンプルをとるかしなければならない。特に社会変動を解釈するための方法のひとつとして，複数の家族からなるサンプルを取り出して同一家族内の2世代あるいはそれ以上の世代にインタビューをすることが考えられる。あるいは，サンプリング・プランが初期に行なったインタビューからの発見への対応として生じてくるときには，もっと柔軟なアプローチをとることもできる。たとえば，目的を持った「戦略的サンプリング」である。目的や困難さが異なる場合，プロジェクトは異なる解決策を要するのである。主要な問題は，オーラル・ヒストリー研究者がその研究について数量的な意味合いもいつも考えなければならないということである。そして研究目的にかなったサンプリングの戦略を考えなければならないのである。質的かつ数量的な説明力を目指すためにも，そうしなければならない。

サンプリングに注意を払うことは，いつも私がやってきたことである。たとえば，私たちが研究したステップファミリーは既存の全国サンプルから取り出したものであるが，『エドワード時代の人々』では，私たち自ら全国的なクオータ・サンプルを作り出したのである。しかし，あまりにも多くの社会研究者たちはどちらかの方法に極端に偏りすぎている。その結果，一方に全国的な質問調査を行なう統計研究者がいて，彼らは20年間一度も自らフィールドワーク・インタビューをしたことがなかったかもしれない。そしてもう一方に，質的調査研究者がいて，自ら録音した一握りの

貴重なインタビューに専念しているが，立証できるような結論を導き出せないでおり，それだからこそ，しばしば純粋にナラティヴ分析をしたり，あるいはインタビューをするときの関係性に関する個人的影響に終始したりしている。サンプリングに注意を払うオーラル・ヒストリー，あるいは広範な質問調査と連携しているオーラル・ヒストリーは，数量調査と質的調査の溝を埋める重要な可能性を秘めている。またそうした溝を埋めることによって，質的調査も数量調査も強化されるのである。

数量的な意味合いを持つ質的調査が日本でどの程度可能なのかは私にはわからない。これまでのところ，質的調査は主として個人研究者によってなされてきており，質的調査を使った大規模なプロジェクトを私は知らない。数量調査研究を行なっている東京大学社会科学研究所のデータ・アーカイヴはごく最近設立されたにすぎない。日本では，階級構造に関する数量調査が行なわれてきており，国勢調査やその他の資料による研究を行なっている国立社会保障・人口問題研究所（National Institute of Population and Social Survey Research）もある。しかし，こうした研究と質的調査の連携は行なわれていない。政策研究大学院は最近，政治家や影響力のある実業家へのインタビューを集め始めた。しかしそのサンプルは，政治的に限界があるようで，サンプリングに注意を払わなければならないことを強調するひとつの例である。

明白なことだが，統計だけからわかることには限界がある。たとえば，「移民」は地球的に見て非常に重要な問題である。人々がどこからやってきたか，男女の人口比，給料の比較など，私たちには無数の統計がある（これら公的な統計でも深刻な限界があるかもしれない。たとえば，合衆国では，実際に居住する西インド諸島の出身者は，合法的入国者の2倍であろうと推測されている。そしてメキシコ人の数はもっと疑わしい）。しかし，統計だけから得られる情報は，なぜある文化の人々はよりしばしば移民し，他の文化の人々はそうではないのかを説明しない。より多くの移民を送り出す文化の問題を知るには，ナラティヴな記述が欠かせない。たとえば，イングランドではインディアン・レストランの90パーセントはガンジス川のデルタ地帯にあるバングラデシュのやや小さな町，シレット出身の家族によって経営されている。彼らのライフ・ストーリーから，シレットの人々は伝統的に，広い網目のようになった川の流れや季節的な洪水のなかを案内するのに熟達した人たちで，1920年代から1940年代にかけてイギリス商船団の船員になったことがわかる。彼らのうちのあるものはイギリスの港に定着し，そのなかの何人かが，初期インド人コミュニティーに食事を提供するレストランを始めたのである。こうした初期の移民の成功によって，20世紀の後半には劇的な移民の鎖が生じたのである。イギリスにやってきたバングラデシュ移民の家族数，その家族内の男女が賃金労働に就いていたかどうか，また収入や相対的貧困でさえも統計から推計することができる。しかし，深く分け入った叙述なしに，近所の人々や親戚の人ではなくなぜ彼らがイギリスにきたのか，大きく異なる文化の間の移動を彼らがどのように経験してきたのか，性的な魅力を強調する傾向が強くなってきている西洋の国の大通りで，ベールをかぶっているバングラデシュの女性である

ことは何を意味するのか，彼らの希望と抱負は何なのだろうかなどについて理解するのは不可能である。オーラル・ヒストリーはこうした疑問について，バングラデシュ移民だけでなく，世界中にいる数知れない移民のグループについて語ってくれるのである。

日本もまた移民を送り出し，また移民を受け入れてきた国である。日本への移民に関する研究はあるが（ライフ・ストーリーはあまり使われていない）。現在大阪の国立民族学博物館（民博）で行なわれている移民の「トランスボーダー」文化を記録するプログラムは特に，期待が持てるものである。しかし，この分野においてはもっとオーラル・ヒストリー研究をする余地がある。また海外に住む日本人に関して，彼ら自身の言葉による，より包括的な研究がなされうる。すでに，南北アメリカやイギリスにいる日本人の優れた研究はあるが，他の国についてはまだ不十分であり，海外の日本人の姿はまだ断片的である。

数量調査と質的調査の資料を組み合わせることがオーラル・ヒストリーを強化することを示す第2の例は，人口統計学的変動のダイナミズムである。世界中のほとんどの国が――ヨーロッパの大部分におけるように――人口の沈滞か減少に苦しんでいるか，あるいはもっとよくあることだが，過度に急激な人口増加に悩まされ，永続的な貧困を運命づけられると，人口増加を非難している。人口の動向に影響を与えようという政府の試みは，ほとんど目に見える効果を与えてはこなかった。たとえば，イタリアのファシストもロシアの共産主義者も人口を維持したが，国内の出生率を上げようとしたのはまったく効果のない試みだった。繰り返すが，数え切れないほどの統計が出生率の問題を扱ってきた。しかし，調査に使われた質問は中流階級の男の常識による推測に基づいていた。1970年代に，ダイアナ・ギテンスは，労働者階級の女性たちのバース・コントロールの方法に関する知識の伝達を扱った修士論文の一部として，オーラル・ヒストリー研究を行なった。それまでは，バース・コントロールの知識は最初に教育のあるミドルクラスの女性の間に存在し，ミドルクラスの女性たちから他の階級に伝播していったと思われていた。しかし，ギテンスはまず20人にインタビューをして，ミドルクラスの近くにいた労働者階級の女性たち，たとえばミドルクラスの家庭で働く家事奉公人たちは，ミドルクラスからはバース・コントロールについてなんの知識も与えられなかったことを発見した。実は，最もよくバース・コントロールに関する情報を得ることができたのは工場や事務所で他の女性たちと一緒に働いていた女性たちだった。彼女たちは情報を交換し，ブルジョアジーからは独立していた。

したがって，19世紀後半から20世紀初頭にかけての家族構成員数の減少には，ひとつの社会階級からの影響以上のものがあったのである。端的にいえば，家族構成の変化におけるブルジョア文化の影響の重要性は，実際よりもはるかに過大評価されていたのである。また，避妊法を導入したのは男であったと信じられていた。この思い込みは統計それ自体に現れていた。統計では，出産数は夫の職業のみで比較されているのである。最初に行なったオーラル・ヒストリー・インタビューから引き出した仮説を基に，ギテンスは彼女の著書である『倫理的な性』（*Fair Sex*, 1982）で，出産

数に関する統計を再吟味することができた。その結果，労働者階級の家族構成員数が決定されるにあたって，女性の職業は男性の職業と同じ程度に重要な要素となっていることを証明できたのである。

出生に関する分野もまた，家族福祉システムが強いというイメージにもかかわらず，日本は最も出生率の低い国のひとつであるので，オーラル・ヒストリーの資料を使うことによって成果が期待できる分野である。家族社会学は日本の社会学者の間での社会学研究の重要な分野であるが，この分野でもまた，戦後の家族構成のパターンと家族関係の変化に，ライフ・ストーリー・アプローチは使われてはこなかった。

II　オーラル・ヒストリーの主要テーマ

研究テーマという点で，オーラル・ヒストリー研究のもつ特に優れた強みと可能性とはなんであろうか。私は次の4点を強調したい。つまり，隠れた声，隠れた領域，口述伝承，そして異分野間の学問を人生を軸にして関係づけることである。

まず，第1に「隠れた声」について考察してみよう。実際のところ，すべての男女は社会的かつ歴史的に興味深い，語るべきライフ・ストーリーを持っている。そして土地所有者，法律家，聖職者，ビジネスマンたち，銀行家たちなど権力を持った特権的な人々のライフ・ストーリーからも私たちがわかることは多い。しかしオーラル・ヒストリーは，権力の辺境に生きる人々や，記録にほとんど残されにくいためにその声を聞くことが難しい人々の経験にアクセスさせてくれるという特別の力を持っている。隠された声というのはとりわけ女性の声である。だからこそ，オーラル・ヒストリーは女性史の創造にとっては基本的なものなのである。しかし，ほかにも声を奪われた人々はいる。組合に組織されていない労働者たち，極貧の人々，障害者の人々，ホームレス，あるいは周縁化されたグループの人々である。

日本では，女性史はオーラル・ヒストリー研究のなかでも特に活発な分野である。女性史のオーラル・ヒストリーは，主としてコミュニティーの歴史として行なわれ，しばしば地域の先生たちが指導してきた。その他にも日本でオーラル・ヒストリーを使って研究されるかもしれない周縁化されたグループとしては，障害者，エスニック・マイノリティー，ホームレス，不安定なパート・タイムを掛け持ちして生きている女性たち，高齢の独身女性，精神的な病で苦しんでいる人たち，家庭内暴力に苦しんでいる人たち，斜陽化する産業で働く人々，失業した人たちなどである。

第2に，「隠れた領域」，つまり歴史的記録にあまり現れない人間生活の側面である。多分，なかでも最も重要な領域は家族関係である。たとえば，子供時代のように，家事奉公人のいるような特権的な家族から都市の浮浪児まで社会グループによって異なる経験がみられる，人生のある時期などである。さらに，オーラル・ヒストリー研究者たちだけでなくほかの研究者からも無視されてい

るのは，高齢化の問題である。年をとることは，おどろくほど知られていない経験である。高齢化は緩やかな後退と低下の段階としばしば考えられてきたが，『私は年を取ったとは感じない』（*I Don't Feel Old*, 1990）でのインタビューから私が発見したのは，逆に，高齢期とは，人々は落ち込みや病気と闘うために，若い時期の人生経験を創造的に利用していかなくてはならない，非常に挑戦的な根本的変化の時期であるということであった。たとえば，ある女性が，新たに始めたフラワーアレンジメントを芸術的だった父親と関連付けて話し，また再婚してダンスと愛の日々を送っていることを話しているように，高齢化という挑戦に成功した人々からどのようにして新たな趣味を一生懸命に始めたかというのを聴くのは衝撃的であった。

日本でも老人の研究はされてきたに違いない。しかし，オーラル・ヒストリーの資料を使えば，老人たちのより主観的な視点が発見され，老人たちを励ますことになるだろう。

そのほかの「隠れた領域」として暴力とドラッグなど犯罪研究の領域がある。現代における犯罪研究は難しく，時には危険であるが，犯罪研究はシカゴ・ライフ・ストーリー学派の主要なテーマのひとつであった。年をとった元犯罪者にインタビューをすることも可能である。今も刑務所にいる男たちの証言を基にした数冊の非常に価値の高い本がある。日本ではオーラル・ヒストリーを使った犯罪者の研究はほとんどないかもしれない。

「隠れた領域」として，さらに，自動車工場，プランテーション，そして砂糖製造所などでのインフォーマルな労働文化もある。1980年代に私自身が行なった自動車工場に関する研究では，職場監督官たちが決して理解していなかった職場における労働者たちだけの文化を，いかに労働者たちが維持していたかを知って，私は驚嘆した。たとえば，チェス，読書，線路沿いの盛り土で捕まえたウサギの皮剝ぎ，誕生日パーティーの企画，クリスマスのお祝いなどである。クリスマスのために，彼らは車の余った部品を使って，流れ作業ラインの上にピカピカ光る電灯の大きな回転システムを作り出した。労働者たちは単調な流れ作業の労働に不満を示していたが，それらの遊びは熟練労働者としての能力を依然として持っていることを示すことを狙ったものだと私は結論を出した。

この分野は特に研究の余地のある分野である。たとえば日本人は最も勤勉な人々であるという言説が戦後日本の高度成長を支えてきた。しかし，不況により，日本の労働者の態度は変わりつつある。この変化は日本のオーラル・ヒストリーにおいて重要なトピックとなるだろう。

もっと最近では，シティー・オヴ・ロンドンの金融エリートの間でも，少なくとも1970年代までは，驚くべき遊びが広まっていたことが『シティーの人生』（*City Lives*, 1996）からわかった。証券取引所では，たとえば，ジョークを言ったり，叫んだり，ブーイングをしたりする言葉遊びだけでなく，紙をダーツにして頻繁に投げ合ったり，お互いの仕事上の書類を燃やしたりもしていたという。株式仲買人は，ほとんど全員が男子寄宿学校で教育を受け，大人になっても学校時代と同じようなやり方で遊んだのである。職場に女性を受け入れるようにせざるを得なくなったときに初めて，男性だけのクラブ的雰囲気に風穴があき，もっとまじめな雰囲気が規範となったのであった。驚く

ことではないが，こうした労働文化は，金融の世界に関する公式的な歴史ではほとんど言及されることがない。

このような金融世界の別の側面を明らかにしたものとして酒井順子の最近の研究がある。彼女はエセックス大学で，後に魅了する本となった『シティー・オヴ・ロンドンにおける日本人銀行員たち』（*Japanese Bankers in the City of London*, 2000）の基となる研究をした。彼女は，日本人男性社員とイギリス人社員が同じ職場でまったく異なる労働文化を維持していたことを発見した。例外的には，日本人の何人かは，５時半には帰るべきだというイギリス人の主張に影響されて定時に帰るようになったが，１時間ぐらい後にこっそり会社に帰っていた。しかし，概して，イギリス人と日本人は直接的にコミュニケーションをとることが非常に難しいと思っていた。その結果，日系金融機関の仕事は現地雇用の日本人女性の橋渡しに頼っていた。彼女たちはイギリスに移民し，そのなかには日本における女性への束縛から逃れるためにイギリス人と結婚することを選んだ女性が多かった。こうした日系金融機関内における分離した労働文化が，西洋的文脈における国際金融で成功を収めることのできなかった日系金融機関の衝撃的な失敗のひとつの説明となっている。

第３番目に，「神話と伝承の領域」がある。神話と伝承は，記憶の社会的形成の例として，民話として，歴史的真実の変形として，伝統の創造としてなど，さまざまな視点から見ることができる。私にとって最も重要なのは，神話と伝承が現代に生きている人々の生活に直接関係している場合である。南北アメリカでは，口述伝承はアメリカ先住民が土地の所有権を主張する重要な証拠として使われつつある。キロンボス（*quilombos*）と呼ばれる自由黒人にとっても同様のことがいえる。ヒュー・ブロディーの綿密なオーラル・ヒストリー研究である，カナダ先住民の狩猟地域に関する『地図と夢』（*Maps and Dreams*, 1981）は，そのような研究のモデルとなるものである。さらに，ラファエル・サミュエルと私が『私たちを導く神話』（*The Myths We Live By*, 1990）で論じたように，神話と伝承は日常的なアイデンティティーといろいろな領域における闘いにとっても決定的に重要なものとなりうる。たとえばアイルランドにおけるカトリックとプロテスタントの間で，今も行われている1680年代の戦いのパレード，あるいは中東におけるユダヤ人とパレスチナ人の争い，職場における男女間の権利をめぐる争い，あるいは家族内における世代間の葛藤などの闘いである。

神話と伝承は，日本のオーラル・ヒストリーにとっても非常に重要である。この分野ではすでに民俗学者によって重要な研究が行われてきているし（たとえば柳田国男），常民文化研究所は口述伝承の収集のひとつの中心であった。

日本には数多くの神話や口述伝承があったが，その使われ方は近代化の過程においては積極的に評価できるものではなかった。神話や伝承は日本人の国民的プライドを形成するのに使われたのである。第二次世界大戦前には古代天皇制に関する神話は歴史的事実として扱われ，人々は天皇を「神」として受け入れなければならなかった。神話と伝承は，日本人を帝国戦争に引きずりこんだのである。日本人は自らを他の国民より優秀であると信じ込み，非常に防衛的な文化アイデンティ

ティーを発展させた。戦後においても，単一で勤勉な日本人という神話はミドルクラスの日本人の間にいきわたり，日本の会社文化を強化したのである。

家族内における世代間の伝達は，祖母が孫娘に独立している母性を示すなど，一方では直接的で観察できるモデルと，他方では象徴的な神話であってもアイデンティティーを形成する影響力となるものとの混合でありうる魅惑的な例である。たとえば，私が現在，エレーヌ・バウアーと一緒にインタビューを録音しているトランスナショナルに暮らしているジャマイカの家族では，これまでのところ，誰一人彼らの先祖を黒人奴隷だといっていない。たった一人黒人の先祖であるとして言及されたのは，自由のために戦った黒人脱走奴隷だった。その一方で，ほとんどのインタビュイーは白人の先祖の名前をあげた。そのなかには，戦いに負けて政治犯として束縛されたスコットランドの高地地方の人をあげた家族もあった。これらの家族の多くが，今も19世紀半ばに彼らの一族の最初の自由黒人から家族内で受け継がれてきた「家族の土地」で農業をしているので，彼らの先祖の名前はたやすく伝承されてきたはずである。また全員にとって自由人の先祖よりも奴隷の先祖のほうが多かったに違いない。しかし，トランスナショナルな移民家族として，ジャマイカの人々は大いなる独立と決意のもとに生きている。彼らが知らなければならないのは，そして彼らが記憶するべきなのは，奴隷の子孫であることではなくて，自由な男たちの子孫であることである。

同様に，元日本兵のライフ・ストーリーでは，父親が軍隊で成功し，高い地位にあった人は先祖についてあまり言及しなかった。しかし社会的地位があまり高くない人や高等教育を受ける機会がなかった人たちは，先祖が侍であったとか，あるいは社会で高い地位にいたということを強調した。1970年代から1980年代にかけて，日本は階級のない社会だというのが一般的に信じられていたにもかかわらず，日本人のインタビュイーは社会的な出自や教育について非常に敏感だった。

家族内の伝承が現在の行動に与えた影響についてのもっとも顕著な例は，ジョン・ビン・ホールが私に語ったもので，それは『私たちを導く神話』のなかに収められている。彼は18世紀半ばに，明らかに作戦中の臆病さの結果，マジョルカ島を失ったことで有名なイギリスのビン提督の子孫だった。懲罰として，ビン提督は自らの船の後甲板で銃殺刑になった。ビン・ホール家はその公けの辱めを受けて以来，すべての世代で，ほとんど狂ったかのような勇気をかならず示してきた。たとえば，ナイジェリア総督だったジョンの祖父は，丘の上で白いバスローブだけを着て，武器を持たずに立ちはだかり，反乱を鎮圧した（それは反乱者たちが幽霊だと思ったために成功したのだった）。またジョンの父親は，マウマウ団のテロが最も激しかったころ，ケニアにある農場を守るためにいつも手を猟銃にかけて寝ていた。ジョン自身も，若かったころ船でアフリカからイギリスに帰ってくる途中にポリオにかかった時に，自分がどれほどその家族内の神話を内面化していたかを理解した。そのときジョンが夢で見た幻覚は，砲弾で脇腹を撃たれるというものだった――ちょうど2世紀前にジョンの先祖が撃ち殺されたように。

酒井が録音した日本人銀行員の家族内での伝承では，おそらく日本の中流階層の人たち一般に共

通するだろうが，正直さ，誠実さ，勇敢さ，一生懸命勉強することが家族内の伝承だと主張された。今は80歳を越えた元日本人兵士も同様の話をしている。そうした国民的プロジェクトと関係した伝承や神話はしばしば負の要素であったが，コミュニティーのなかにはもっと人間的な，そして積極的に評価できる神話も存在するだろう。

最後に私は，テーマ的な可能性という点では，ライフ・ストーリーを使ったオーラル・ヒストリー・インタビューが，人生を通して異なるものを関連づけていることにおいて特に優れているということを強調したい。多くの記録文書は異なる範疇に分類される傾向があり，それらを再び関連させることは容易ではない。たとえば，移民研究では移民送出国と受入国に関する情報はたくさんあるかもしれないが，ライフ・ストーリーだけが両方の情報を結び付けて，移民前から移民後への過程を意味づける，説得力のあるナラティヴにすることができる。たとえばどんなタイプの人々が国を離れるのか，なぜ移民をするのか，彼らは何を得るのか，そしてそれは彼らにとって何を意味するのか，なぜ彼らは留まるかあるいは国に帰るのかを決めるのか，などの問いに答えることができるだろう。

私は家族と労働との間の関連に特に関心を持ってきた。そしてこの問題は，私のスコットランドの漁村の研究『漁業に生きる』の主要テーマであった。私は異なる4地域に焦点を当てた。それぞれが家族構造と企業家精神という点で驚くほど違っており，私は家族と労働が緊密に関連しているという結論に至った。最も成功した漁業はシェットランド諸島やモーレイ・ファースのような地域にあり，そこでは家族所有の船があり，子供たちは平等主義的な家族のなかで育てられ，小さいときから独力で考えるようにと励まされていた。この環境が勤勉で創意工夫に満ちた漁民を生み出し，そうした漁民は道具を改良し，また新たな市場や漁場を探したのである。対照的に，ウェスタンアイルズのような他の地域では，家族はもっと家父長的で，子供たちは厳しくしつけられ，年長者に従うように教え込まれ，大人は改良をしようとすると意気阻喪させられていた。私にはその地域が停滞し，あるいは衰退していたのがわかった。ウェスタンアイルズでは男たちの間にはかなりの割合で飲酒が見られ，家庭内暴力もあった。私はウェスタンアイルズのある男が語った話を特に覚えている。彼の祖父が何年間かカナダに住み，新しい考えを身につけた後，どのようにして帰ってきたか，どのようにしてもっと大きな船を買ったか，またどのようにして最も大きな荷馬車を買ったかをこの男は語ったのである。祖父はしばらくの間はうまくやっていたのだが，2，3年たって収穫時に荷馬車に轢かれて死んだ。島の人たちは祖父の死を神の報復だといったという。なぜなら彼の祖父はこの世の物の重みで死んだからだ，といったのである。

戦後日本には，家族と労働の関係について特有の考えがあった。最近までは，核家族イメージと父親の終身雇用というイメージが，女性の多くを常勤の仕事から追いやってきた。そのようなイメージは理想的な家庭を持たない男女を見えない存在としてきた。国の政策はそのような規範的イメージを基としており，理想的な家族生活をおくらないものは無視されていた。

個人の創造性の社会的起源は，私のオーラル・ヒストリー研究における主要な関心であった。さらに最近，私は社会研究者のパイオニアについてインタビューをしてきた。そこでもまた，完全なライフ・ストーリーから，これまでは関連付けられていなかった事象間の驚くような関連性を発見することができる。たとえば，過去50年間，貧困や高齢者と家族に関するイギリスでの研究を主導してきたピーター・タウンゼンドに私がインタビューをしてライフ・ストーリーを録音したとき，彼自身，シングル・マザーによって育てられた一人っ子であることがわかった。だから危機の際に親族が果たす役割が後退していることは，ピーター・タウンゼンドの記憶では重大な問題であったのである。同様に，ロンドンにある大英図書館のナショナル・ライフ・ストーリー・コレクションでは，建築家や彫刻家の，さらに最近では芸術家や工芸家の，詳細なライフ・ストーリー・インタビューを収集しており，いかに彼らの人生全体が創造性を作りあげてきたのかを明らかにしようとしている。

III　オーラル・ヒストリーへの主要な挑戦

ここで，将来のオーラル・ヒストリーが直面するであろう主要な挑戦のいくつかについて検討してみよう。

a）記憶

最初にずっと問題になってきている「真実」の問題をみよう。つまり記憶の性質についての問題であるが，私たちは，記憶を信じられるのだろうか？　この疑問はオーラル・ヒストリー研究者たちにとって常に根本的な問題であり，私は『記憶から歴史へ』（*The Voice of the Past*, 3rd edn., 2000, 1st published in 1978）――［邦題の「記憶」とは，オーラル・ヒストリー研究者が通常意味する「記憶」，すなわち「個人の記憶」であることは本書の内容から明らかである――訳者］のなかのまとまった記述を行なった（4章および5章）ので，ここで詳しくは述べない。簡単に言えば，証言は2つのタイプの内容を結びつけるものである。一方では，証言は事実に関するかなりの情報を与える。たとえば，ある人物の居住地，家族の構造，仕事の種類など，さまざまな方法で，概して信頼できるか確かめられる情報である。しかしこのほかに，証言は記憶を形作る力，個人と集団の意識を形成する力を明らかにする痕跡を提供してくれる。証言のなかには沈黙もある。ルイーザ・パッセリーニは，ファシズムの時代に生きた人々の記憶のなかに沈黙があることに初めて気がついた。そうした沈黙は，親に性的虐待を受けた子供が記憶を抑圧するように，人々がどれほど苦しんだかの刻印なのかもしれない。また，人々は生きてきた過去を意味づけるために，記憶を能動的に作り変えることもある。あるいは，記憶を失われた夢と結びつけることさえある。このことについては，アレッサンドロ・ポッテーリがイタリア中央部にあるテルニの年老いた共産主義者へのインタビューの録音か

ら鮮やかに描き出した。

ポッテーリは，インタビューをしたその地域の活動家のうちの非常に多くが，全員では決してないのだが，警察官がデモ参加者を殺した以前のストライキの記憶を省略していたことを明らかにした。省略された記憶とは，NATOへの参加に反対するデモであった。しかし，人々は鉄鋼労働者の人員削減に反対するその後のストライキは覚えていたのである。おそらくNATOへの参加は一時的な問題であったが，仕事を維持するための闘いは何十年も覚えられていたのであろう。ポッテーリはまた，ある年老いた共産主義者が，革命が起きなかったことを追認するために，起こったかもしれない過去についてのストーリーをどのように話したかについて叙述している。共産党が武装したパルチザンとして戦い続ける代わりに，戦後第一回の選挙に参加することを決めたときに，その年老いた共産主義者自身はイタリア共産党の全国的な指導者のトリアッティに革命の絶好の機会を逃すことに対して『マルクスが言ったように，ツグミ（弱気の象徴）が飛ぶときは撃つときだ』と警告したというのである。しかし，実際のところ，この老いた共産主義者がトリアッティとそのような個人的会話をする機会はなかったし，マルクスがツグミについてそんなことをいったことはなかった。その年老いた共産主義者は，イタリア中部の農民のことわざを引き合いにしたのである。この2つの例にみられる，ポッテーリによって聞き取られた記憶は，事実としては真実ではない。どちらの場合も，彼らが，経験の記憶を作り変えたり，創造したりすることによって，まさに実際の出来事に呼応して，地域の共産主義活動家たちの意識がいかに発展したかについて，そしてまた活動家たちがいかに彼らのマルクス主義を地域に残っていた昔からの民衆文化と結びつけることができたかについて，生き生きとした証拠を示しているのである。

こうした記憶の再形成は，家族の価値観をみるときでもまた有効でありうる。特に記憶の再形成は，同一家族のなかの何世代かにわたってインタビューをするときに現れやすい。たとえば，イギリスに住む年老いたジャマイカ人の女性へのインタビューをとりあげよう。彼女は看護婦として働きながら，ある教会で非常に積極的に活動をしてきた。彼女は私に，非国教会の牧師との結婚と子供について極めて率直な話をした。しかし，後に彼女の孫娘にインタビューをしたときに初めて彼女が牧師と出会う前に未婚の母として長子を生んだことがわかったのである。もちろんその長子は二人の間の子供の一人として育てられたのだが。また彼女はその牧師が死んだ後に，短かったがうまくいかなかった再婚も経験していた。ジャマイカの文脈からみれば，そのような家族物語はまったく普通のことである。実際大多数の女性は婚姻外で子供を生んだ。しかし，彼女にとってはライフ・ストーリーを作り変えることは教会の指導者としての彼女のアイデンティティーを維持し，尊敬される存在であるために明らかに役立つことだった。

もう一度繰り返すが，要約するなら，私たちは事実から学ぶのと同じくらい，記憶が事実から再構成されることから学ぶことができるのである。そしてこのジャマイカの女性の場合，そのどちらも口述の回想から得られるのである。記憶の問題は，オーラル・ヒストリー研究者にとって根本的

な問題であろう。しかし，客観的でありかつ主観的であるというオーラル・ヒストリーの二重の強みに対して自信を持って，われわれはこの問題に積極的に取り組むべきである。

日本では，オーラル・ヒストリーによる証言の信頼性についてどのような議論が行われているだろうか。特に，帝国戦争における日本の歴史的役割を検証し，戦争の歴史を書くとき，オーラル・ヒストリーは信頼できるものだろうか。この問いは，オーラル・ヒストリーが日本に紹介されたとき，もっとも大きな問題となった。1980年代後半に『歴史学研究』でオーラル・ヒストリーが議論されたとき，口述資料の信頼性と妥当性が歴史家たち自身によって議論された。また，本多勝一は，歴史研究者は語られることよりも，体験を見ていかなければならないと主張した。一方，澤地久枝は学者たちに，口述の証言を使っているジャーナリストとコミュニケーションを図るように求めた。しかし，こうした初期のオーラル・ヒストリーに関するディスカッションにもかかわらず，それ以来オーラル・ヒストリーに関する議論は発展してはこなかった。

対照的に，日本軍の性的奴隷にされたことによって苦しめられた「慰安婦」が1991年にその経験を語り始めて以来，オーラル・ヒストリーの方法論は，左翼的歴史学者からも修正主義の歴史学者からも批判されてきた。

修正主義の歴史学者は，慰安婦の証言も含めて，日本軍の犠牲者の口述証言の信頼性を疑問視した。彼らは日本の戦争犯罪は作られた物語だとさえ主張した。さらに，こうした修正主義の歴史家たちは，日本は国民のプライドを取り戻す必要があると主張し，新しい教科書を作って，新たな国民の歴史を作る運動を開始した。実際のところ，この教科書を採用した高校はまだ少ないが，こうした右翼的運動家たちは日本の帝国主義の犯した残虐行為を消してしまうであろう新たな国民の記憶を確立するために，今も活発に活動している。

こうした動きに対抗して，左翼的歴史家たちは右翼的な修正主義歴史家たちを，物語的歴史を作ろうとしているとして非難した。天皇は神であったというような戦前の国民的神話の復活を防ぐために，1945年以来左翼歴史家たちは記録文書を基にした歴史を確立しようとしてきた。戦前の捏造された公式の歴史とは対照的に，戦後の左翼歴史家たちは「事実」に基づく歴史研究法の重要性を強調してきたのである。その結果，オーラル・ヒストリーは右翼的修正主義歴史家たちからも良心的な左翼歴史家たちからも批判されてきた。

オーラル・ヒストリーの日本での適用をさらに複雑にしているのは，最近の文化史家の研究に見られる，戦争についての記念物や記念祭にあらわれる集団的記憶への関心である。実際にはフランスの歴史家たちの間でいうところの集団的記憶は，元来は集団的な口述伝承を意味したのだが，日本の文化史家たちは集団的記憶の概念を個人的記憶の価値を下げることに使い，個人的記憶の代わりに風景や記念物などの物質的な歴史遺産に焦点を当てた。もちろん，そのようなものが本当のところ人々の心に何を思い起こさせるかはわからない。だからこそ，私たちがインタビューをしない限り，それらの歴史遺産が集団的には何を意味するかを知ることはできないのである。さらに，集

団的な口述伝承はいつも個人の記憶を通じて伝えられていくのである。そのような「集団的記憶」が個人の記憶に浸透していったのか，そして諸個人はその記憶をどのように使っているのか，あるいは彼ら自身の証言のなかでその記憶をどのように再形成していくかは，ライフ・ストーリー・インタビューによってのみ検証できるのである。だから，もう一度いうが，集団的記憶への関心は個人の記憶の問題を避ける説得的な理由とはならない。

このような経過をたどった結果，オーラル・ヒストリーの方法論の議論はこれまでのところ実り豊かには発展せず，オーラル・ヒストリーは，アカデミズムの歴史家ではなく，主としてジャーナリストたちや在野の歴史家に任されてきた。アカデミズムの歴史家たちは依然として，口述の証拠を，歴史的資料の重要さに順位をつける評価のしかたをするときには，文書資料の下位にあるとみなしている。特に日本の戦争犯罪責任に関する議論ではそうである。

しかしながら，こうした議論は問題に対する無味乾燥なアプローチである。これまで論じたように，また『記憶から歴史へ』で論じたように，口述の資料には，典型的には「客観的な（信頼できる）」ものと「主観的な（解釈的な）」ものとが組み合わさっている。そして，その両方の側面に歴史的価値があるのである。また，多くの状況において，口述と文書資料は互いに補完しあうものとして有効に使われる。先に述べた「隠れた領域」のように，口述の証拠だけが存在し，口述の資料を使わない場合は歴史家として貢献できない場合がたくさんある。多分，最も間違いをおこしやすい例は，記録文書があってもそれらが疑わしい場合であろう。

無邪気な歴史家だけが，軍隊による残虐行為の完全な記録を求めるだろう。たとえば，ホロコーストの歴史は，証言を体系的に集めることによって構成されているのがほとんどである。そして，それらの証言は多くの場合，裁判で使われ，有罪判決を引き出している。同様に，スターリンの恐怖政治体制と彼が作り上げた見えない収容所帝国は，アレクサンドル・ソルジェニーツィンが1970年代に『収容所群島』（*The Gulag Archipelago*）を書くために集めた証言によって初めて明らかになったのである。彼はその本の序章で，以下のように述べている。

> この本は，ただ一人の作者によって書けるものではなかった。収容所から――背中の傷によって，目で見て耳で聞いて――私自身が持ち出すことのできたものに加えて，この本の資料には，227人の証人からの報告として，回想録として，手紙として私に与えられたものもあったのだ。その証人たちの名前はここに記されるべきだった……だが彼らの名前を書く時期にはまだ至っていない。
>
> 私には文書記録を読む機会はまったくなかった。実際，誰が読む機会があるだろう？　思い出したくない人にはすべての記録を最後の最後まで葬り去る十分な時間があったし，まだこれからだって葬り去る時間はある。

b）ナラティヴとジャンル

第2に，もっと最近の挑戦は「インタビューをナラティヴとして読む」ことへの新たな関心から来ている。ナラティヴ・アプローチには，フリッツ・シュッツやガブリエル・ローゼンタールが，ドイツで年老いた元ナチスにインタビューをするために発展させた解釈の技法から，自伝的ジャンルや言説を分析する文学者や，エリザベス・トンキンが『私たちの過去を語る』（*Narrating Our Pasts*, 1992）で説得的に論じているように，文脈とジャンルがいかに回想を形作るかについての人類学的な洞察まで，さまざまな源がある。私はナラティヴ・アプローチによって得られる洞察をすばらしいと思って，メアリー・チェンバレンと一緒に最近このテーマについて『ナラティヴとジャンル』（*Narrative and Genre*, 1998）という論文集を編集した。

このように繊細さを持ってインタビューを読むことから学べるものが多大であることは疑いがない。たとえば，語り手が公けに話すことに慣れているときに言語やライフ・ストーリーのスタイルがいかに異なっているかは本当に驚くほどである。教会の活動家にみられる聖書のなかで使われるような言い回し，あるいは地域の酒場で夕方に何度もほら話をしている男が話に逸話を入れる技能などである。さらに，男と女が自分たちのライフ・ストーリーをいかに語るかは驚くほど対照的であることもいえる。能動的な「私」という言葉を男性は使って自らを舞台の中心におくが，女性は「私たち」という言葉を使うか中立的な言葉を使い，男性よりも「グループ」を強調する。男と女が日常生活における会話で，どれほど異なっているかについて，特に面白い記述はデボラ・タネンの『あんたはただわからないのよ』（*You Just Don't Understand*, 1990）にみられる。

しかしながら，ナラティヴ・アプローチは申し分なく価値あるものだが，そこには非常に深刻な危険が潜んでいる。あまりにも多くのオーラル・ヒストリー研究者たちが，彼らが集めた証言を何よりもまずナラティヴとして読むことにとらわれていて，語り手が語る内容についていかに語るかというところに焦点を当てすぎているので，語り手が実際に経験したことや実行したことについて何を話したかについては十分に考察する時間がない。だからこそ，ナラティヴに対して非常に繊細になりなさい。しかし，行き過ぎてはいけない。というのは，ナラティヴだけに専念しすぎたなら，オーラル・ヒストリーの元来の目的と可能性を見失うだろうから。

c）共有

第3番目の新たな挑戦は，私たちの資料を共有するための機会への挑戦である。もちろん，資料の共有はオーラル・ヒストリーの実質的な部分である。特に合衆国ではオーラル・ヒストリー研究がアーカイヴ中心で，主として公的な伝記資料を作り出すことをねらうプロジェクトで構成されている。しかしそうしたケース以外では，多くのインタビューはある特定の研究をするために行なわれる。そしていったんその研究者の本が出版されると，テープは家庭あるいは研究室の棚の上に置かれっぱなしになる。ほかの人はそれらのテープを聴くことはできないし，その研究者が引越しを

するとかあるいは引退するとそのテープは捨てられることが多い。そのような詳細なインタビューは，オーラル・ヒストリー研究者だけでなく社会学者によってもしばしばなされるが，他の研究の資料としても同じく潜在的価値があるものである。

私は，もともとは，エセックス大学に『エドワード時代の人々』のために集めたインタビューの書きおこしの非公式なアーカイヴを作ると決めたことから，資料の散逸の恐れがあることに関心を持つようになったのである。このアーカイヴを非常に大勢の人が利用してきた。私自身が書いたものの10倍もの出版物が，この資料を使った他の学者によって書かれたのではないかと思う。私にとってこのことは予期しなかった褒美であり，うれしいことであった。そして1980年代後半には，私はナショナル・ライフ・ストーリー・コレクションを大英図書館内に作ることができ，このコレクションによってオーラル・ヒストリーを保管する全国的な中心が初めて作られたこととなり，資料を作り出すのと同時に資料を受け入れる，まさにアーカイヴができたのである。このコレクションのプロジェクトには（テート美術館との共同研究である）画家と彫刻家のライフ・ストーリーを集めるプロジェクトから，民芸運動に関わった芸術家，銀行家，イギリスにいるホロコーストからの生き残りの人たち，イギリスの鉄鋼業，郵便局，そして北海油田のあらゆるレベルで働く人々の声を聞き取るプロジェクトなどがある。

私たちはまた，社会研究者たちが彼らの集めた資料をどの程度資料館に入れているかに関する簡単な調査を行なうことができた。その調査の結果，1950年代からのすべての重要なプロジェクトの結果としてのインタビューとフィールドワークノートの10分の１しかアーカイヴに入っていないことがわかった。さらにそれらの資料のほとんどはすでに廃棄されているかあるいはその危機にあることがわかったのである。この調査の後，1994年に社会科学研究評議会（ESRC）は「クオリデータ」(Qualidata) を設立し，私たちは「クオリデータ」に第二次大戦直後の研究の多くを廃棄の危機から救い出して寄贈した。またクオリデータではこれから出てくる質的研究の資料を守る方針を定めた。

もちろん，将来において誰も使わないようなインタビュー資料を作り出し，あるいは保存することにあまりにもエネルギーを使いすぎるかもしれない危険はある。この問題に関して，国際的に経験を共有することは緊急に必要である。公共図書館，学校，大学制度を通じて利用できる資料として，定期的に自伝的資料を作り出すスウェーデンの政策に私は特に感銘を受けた。しかし，イギリスでの私たちの経験から，最も使われる可能性が高いオーラル・ヒストリーの資料は，第１に，ある種の全国的あるいは地域的なサンプルをもとにしたものである。そうしたサンプリングをして得た資料は，代表性を持つ資料として利用者に提供できるのである。第２に，広範なテーマを扱っている，かなり詳細な質問をしている完全なライフ・ストーリーとなっているものである。そうした資料からは，もともとの研究者が究明しなかった価値がたくさん出てくる。第３に，書きおこしがされて，要約があり主題別に整理されるか索引がつけられたものである。新しい資料に関しては，

テキストはすべて機械で読めるようになり，録音自体もまたデジタルになるだろう。だから，いったん保存するインタビュー・テキストを選んで整理したら，教育，図書館，研究システムを通じて，こういった資料が利用されるという前例のない新たな可能性が生まれるだろう。

この点において，オーラル・ヒストリーとライフ・ストーリーのためのこれといったデータ・アーカイヴが存在しない日本は，先進国のなかでもかなり遅れている。たとえば著名な日本人の重要なライフ・ストーリー——1978年といえば最近だが，その年に亡くなった国際的によく知られている陶芸家，浜田庄司のことを考えてみよう——を探すことを期待して日本にやってきた外国の研究者は，どこから探し始めてよいかもわからない。国立国会図書館ではインタビューを集めたといわれているが，誰にでも利用できる集めたインタビューのカタログはない。さらにどんな人々にインタビューをしたのかがわからないのは，インタビュー資料を共有し，公共の利用に供することへの理解が一般的に欠けていることの現れである。おそらく，最も多くのインタビューを集めたのは地域の女性史家であろう。しかし，彼女たちは自分たちが集めたテープを保存するだけの資金はないし，彼女たちが将来の歴史家のために集めた重要な資料を守る地域のアーカイヴもない。

d）新しいテクノロジー

ここで私たちは第4の挑戦に出会うことになる。つまり，コミュニケーションにおける新テクノロジーからの挑戦である。新しいテクノロジーからの挑戦をすばらしい機会として取り入れるべきなのだろうか。それとも将来は忘れ去られるものの先触れとして認識するべきなのだろうか。結局のところ，オーラル・ヒストリーは，今ははるかに昔のこととなったが，ラジオがマスコミュニケーションの主流のあり方であったころの，音の黄金時代といっても間違いないときの落とし子であった。私は，先端的テクノロジーを使って印象的な録音をした例は今のところないと思っている。非常にたくさんのビデオによるオーラル・ヒストリー・プロジェクトがなされたが，それらは見るには退屈になるほど堅苦しくて繰り返しが多い。というのは，オーディオ・ヴィジュアルな作品を作るときに見る人を捉えてメッセージを伝えるには，音声だけのときとは違う技術が必要であることを作り手がわかっていないからである。そして残念なことに，同様の弱点が，私がこれまでみてきたマルチメディアのCD－ROMにも繰り返し現われていた。

しかし，他方では，聴衆となる可能性を持った人たちの数や，現代のメディアを通じてオーラル・ヒストリーの届く範囲の影響は測りしれない。一つの例を日本軍の「慰安婦」の問題との関係で考えてみるのは興味深い。スティーヴン・ハンフリーズの「証言フィルム」によって最近製作された番組は，性的逸脱を典型的な理由として，アイルランドのマグダレン・ホームに収容された女性たちのストーリーを伝えた。しかし，実際には，よくあったケースでは彼女たちは地域の重要人物，たとえば聖職者の性的虐待の犠牲者だったのである。虐待者たちは彼女たちを黙らせるために遠くに閉じ込めなければならなかったのである。しかも彼女たちにとってもっとひどかったことは，

彼女たちを待っていた修道院での扱いだった。犠牲者だった女性たちの修道院での生活は，修道女が定期的に肉体的暴行を加え，訪れる神父たちが性的な暴行を加え，激しい労働が永遠に続くかのような日々だったのである。その番組が撮影されたとき，アイルランドに住む犠牲者の誰もが自分たちの記憶が放送されることを許さなかった。だからドキュメンタリーは修道院を出た後イングランドに移住した人の話を基にして作られた。しかし，放映された後の3日間テレビ局が設けたヘルプラインには，同じような経験を報告する，アイルランド共和国に住む女性たちからの電話が400あまりもかかってきた。ここにひとつの例が示されている。押しつぶされた声を放送したことによって，国民的認識が真に変わった例である。

また，マルチメディアやインターネットによってオーラル・ヒストリーが伝播していくかもしれない新たな可能性もある。マルチメディアによる展示は音と映像イメージとテキストを統合するという特別な可能性を持っている。この方法はより若い世代をひきつける重要な方法かもしれない。記憶の場をインターネット上のウェッブサイトに作っていくことも，異なる記録文書を組み合わせていくことも，同様に重要な新しい形式である。ヨーロッパやアメリカのオーラル・ヒストリー・プロジェクトの数多くはこの新しい形式のプロジェクトをはじめた。しかしそれらは，きらめきのある企画がないまま，往々にしてかなり退屈な方法をとっている。この点で，ブラジルにあるおおよそすべてのテーマ――労働組合，市場の露店主，大企業，サッカークラブ，地下鉄の乗客など――についてのサンパウロ人類博物館は，先覚者としての優雅さと洗練がみられる。

e）国際的理解

オーラル・ヒストリーへの最後の挑戦は，グローバル時代のアイデンティティー形成に果たすオーラル・ヒストリーの役割をはっきりさせることであろう。グローバリゼーションの影響と，グローバル経済のなかに次第に取り込まれていく過程を通じて生じる均質化していく世界文化は，私たちのローカル文化をさらに強化することになる。ルーツを持つ感覚，コミュニティーで共有するアイデンティティーは，地域での社会活動をしていくために決定的に重要かもしれない。オーラル・ヒストリーは，疑いもなくこの点に貢献している。『変革のための聞き取り』のために私はブラジルにある2つのスラムに関する事例研究を書いた。そこでは今では学校で教えている集団的ストーリーを創造することが，土地所有権の主張と水と電気の供給を要求する運動の重要な刺激となったのである。そのストーリーとは，いかに人々は土地に定着したか，またどんな道徳的正当性を持って定着したかということについてであり，最後には市長は土地の所有権と水と電気の供給を認めたのである。

私はまたオーラル・ヒストリーは国境を越えた人間の理解を深める可能性があるかもしれないと信じている。災害救援基金のために働くNGOも，オーラル・ヒストリーをそのようなやり方である程度は使っている。私たちはオーラル・ヒストリーを国境を越えて生きている人々をもっと理解

することに使うこともできる。アンドレア・ズーリがアマゾンの熱帯雨林を保存するために活動しているイギリスの運動家の研究で示しているように，NGOのスタッフは国境を越えて生きる人々のひとつの例を示している。より野心的には，近いうちに，翻訳のコンピューター化により，インターネット上に多言語ライフ・ストーリーの国際バンクができることも可能かもしれない。それは資料研究に使われるかもしれないが，もっと単純に，異なる国の普通の人々がお互いについて知り，そして実はお互いの間にどれほど共通のものがあるかを知る方法になるかもしれない。もっと劇的だが，「南アフリカ真実委員会」の聞き取りが全国に日常的に放映されて（時にはおそろしくなるような）アパルトヘイトの証言を見た後で，北アイルランドや中東と同じように社会に深く根ざした対立に橋をかけるオーラル・ヒストリーの役目を誰が想像できるだろうか。

国際理解の分野は，異文化コミュニケーション学の研究活動の強みもあって，日本のオーラル・ヒストリー研究が特に重要な貢献をするために発展しうる分野である。これまで異文化コミュニケーションはきわめて言語学的アプローチがなされてきたが，グローバル経済のなかで日本ビジネスの深刻な失敗により，政府はグローバル・コミュニケーション教育を緊急の課題としている。一般的にいって，英語教育と文化的違いを受け入れることは重要な問題点である。しかし，異文化コミュニケーションを主張する人たちは，同時に日本文化の特異性を強調しすぎている。日本人によるもっと国際的なコミュニケーションを効果的に発展させていくためには，異文化調査は必須である。異なる言語を用い，他の文化の人々のライフ・ストーリーや視点の異なるライフ・ストーリーを聞くことは，より深い理解をもたらすであろう。

現在では，オーラル・ヒストリー/ライフ・ストーリーの国際学会に日本人の出席者は非常に少ない。日本の研究者が国際オーラル・ヒストリー学会のようなコンファランスに出席するのを歓迎する。国際学会においては日本人の研究は非常に興味深いだろう。また日本の研究者も国際学会の議論から得られるものも，また他の国々との方法論上の交換から得られるものも大きいだろう。また日本の研究が『オーラル・ヒストリー』（イギリス）や『オーラル・ヒストリー・レヴュー』（アメリカ合衆国）のような雑誌に掲載されることもよいだろう。(1)

Ⅳ　日本に特有なオーラル・ヒストリーへの挑戦

私がこれまで説明してきたような「オーラル・ヒストリーの研究法」を日本に適用するためには，いくつかの特別な困難があるかもしれない。第1に，異なる学問分野間のコミュニケーションが日

（1）『オーラル・ヒストリー』（Dr. Robert Perks, the Editor of *Oral History*, British Library National Sound Archive, 96 Euston Rd, London NW1 2 DB, UK）と『オーラル・ヒストリー・レヴュー』（the Editor of *Oral History Review*, University of Alabama, Huntsville, Alabama 358899, USA）は，英語で書かれた日本の研究者の論文の投稿を歓迎する。

本では簡単ではないかもしれない。第2に，大学と地域の研究者の間の区別は非常にはっきりとしている。そして学者たちは，フィールドワークに時間をかけることよりも理論的議論に参加することがより重要であると考える。反対に，コミュニティーの歴史家や個人研究者は，理論的あるいは方法論的議論に参加する機会はほとんどない。私自身の経験からみて，理論は実践からかけ離れるよりも実践と緊密な関係を持ったときに最も発展する。それ以上に，コミュニティーの歴史家たちには財政的な援助がない。また日本の助成金システムでは所属のない個人研究者は政府によって基金が与えられたプロジェクトに名前を載せることができない。したがって，大学教授たちにとっては個人の研究者たちは助成金獲得に無用の存在である。こうした区別が特に強い日本では，大学研究者とコミュニティーの研究者が共同研究を行なうことは簡単ではない。だから，大学の教授たちによって始められるオーラル・ヒストリーを促進する新たな組織を，コミュニティーの研究者や個人研究者に広げていくことは真剣に考えられなければならない。日本のオーラル・ヒストリーは，実際のところ，日本特有に階層化されたやり方で発展するかもしれない。そしてその結果，オーラル・ヒストリーの大きな強みのひとつである境界を越えた共同研究の可能性は損なわれるかもしれない。

さらなる問題は，願わくは一時的なものであってほしいが，多分大学研究者たちがオーラル・ヒストリーの最も重要なポイントである技術を軽視していることによるものであろう。オーラル・ヒストリーは，個人の経験を聞くことに非常に今熱心になってきているが方法論的議論に興味のないとみなされてきたコミュニティーの研究者や個人研究者のものとされてきた。こうした偏見が，オーラル・ヒストリーは単に，大きな歴史とは関わりのない個人の些細な視点を集めるものだという理解を助長するのである。もし，若い大学院生がオーラル・ヒストリーをしているといったら，周縁化される理由となるかもしれない。イギリスでは，オーラル・ヒストリーは最初から学問的分野として構築されてきたが，日本ではオーラル・ヒストリーは学問的分野としてはまだ認識されてはいない。

日本におけるオーラル・ヒストリーにとって特に困難な点は，オーラル・ヒストリーの方法論が日本近現代史の議論に関わってきたことである。日本の帝国主義戦争が終わった後，日本の知識人にとっては戦争責任と平和主義が最大の問題となってきた。最も影響力を持ってきたのは，日本は侵略したアジアの国々に謝るべきだと主張し，日本は二度と軍隊を持つべきではない，靖国神社に戦争で死んだ日本兵を神として祭るのはいけないという主張であった。しかし，最近では修正主義歴史家たちが日本人は国を誇りに思うべきであり，左翼的な屈辱的歴史観を捨てるべきだと主張している。そのような修正主義歴史家は今，「国民の歴史」を代表すると主張している。彼らの「国民の歴史」は第二次世界大戦中の日本の戦争犯罪を否定し，第二次世界大戦以前のヨーロッパの帝国主義を批判している。オーラル・ヒストリーの神話的側面は，この新しい修正主義に反対する左翼知識人にとっては更なる危険だとおもわれる。しかし，適確に使われるならば，オーラル・ヒス

トリーの方法論は日本の近現代史を再検討するにあたって特に強みを発揮することができると私は信じている。

結論として，だから私は，日本国内でも国際的にも，今日においても将来においても，オーラル・ヒストリーに道を開く豊かな可能性を確信している。聞くことを学ぶのは，人間にとって根本的な技術である。聞くことを大事にする人にとって，私たちの過去をもっと完全に理解することを助け，もっと豊かな国民の記憶を創造し，だが同時に私たちがよりよい未来を建設するのを助けてくれるオーラル・ヒストリーがそこにある。

オーラル・ヒストリーの最も大きな力は，私たちが個人のエージェンシーをみることができるところにある。そして，ライフ・ストーリーを聞くプロセスを通じて，研究者自身も自らのエージェンシーが堅固な社会構造から自由になっていくのに気づく。ライフ・ストーリーを聞き取ることは，社会のなかで目立たないまま生きていても，私たち自身の人生がどれほど重要で価値のあるものであるかに気づかせ，個人としての私たちに力を与えるのである。

オーラル・ヒストリー研究の過程は，インタビュアーとインタビューをされる人の間での共同作業である。この方法は，学問的議論にも使えるが，同時にオーラル・ヒストリーは，学校の子供たちから老人まで，確立した学者たちから高等教育を受ける機会のほとんどなかった人たちまで，誰にでも使える方法論である。

オーラル・ヒストリーは，人々に歴史を自ら書く機会を与えることによって人々に力を与える決定的に重要な方法である。「オーラル・ヒストリー」という用語がさほど使われていなくても，そのような考えと実践は既に日本のなかに広がっているかもしれない。*The Voice of the Past* の日本語訳『記憶から歴史へ』が，より充実したそして深い理解をともなう歴史をめざして，またよりよい，より思いやりのある，そしてより民主的な将来に向かうオーラル・ヒストリー運動の一助となることを望んでいる。

（英国エセックス大学社会学部教授）

（訳者 立教大学非常勤講師）